

千々岩靖子『カミュ：歴史の裁きに抗して』

安藤, 智子
九州大学大学院人文科学研究院：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/1495152>

出版情報：Stella. 33, pp.271-275, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



千々岩靖子『カミュ——歴史の裁きに抗して』

安 藤 智 子

2013年のカミュ生誕百周年にあわせ、フランスでは作家の往復書簡集が3冊同時に出版されたほか¹⁾、新刊の研究書が続々と書店にならんだ。日本でも東日本大震災が契機となり、連帯のモラルを問う小説『ペスト』が人々の関心を引いたことは記憶に新しい²⁾。このようにカミュ文学の現代性を再評価する気運が高まるなか、本書『カミュ——歴史の裁きに抗して』³⁾の公刊は、研究者のみならず一般読者にとっても朗報であろう。歴史をめぐる考察はカミュの思想形成に重要な役割を果たすが、作家が語の定義を明確にせず、文脈によって多様な意味を与えるため混沌の印象を免れない。これに対して著者は先行研究を丁寧に整理しつつ、歴史に注がれる作家の視線と小説創造との関係を綿密に論じ、全作品を捉えなおす新たな視座の提出を試みている。「不条理」や「反抗」という名で語られる思想の要諦を把握し、代表作『異邦人』や未定稿『最初の人間』の「謎と魅力」⁴⁾を理解するうえで本書の寄与するところはけっして小さくあるまい。

以下、4部構成をもつ本書の内容を概観すると——。まず第1部「カミュの政治的思索と非-歴史性のモラル」は、アルジェリア時代の政治的言説および創作活動を扱う。著者は構想の時期を勘案して『異邦人』までを射程に入れ、当時の状況に照らしてカミュの歴史意識がいかなる意義をもつかを検討する。従来『異邦人』については物語の舞台となるアルジェリアの描写に歴史意識が稀薄であると論難し、それを作家の植民地主義に帰する誹謗が繰り返されてきた⁵⁾。他方、研究者の間では小説創造と政治思想を切り離して論じるのが通例となっている。この問題にかんして著者は、いずれの立場も物語の非-歴史性と非-政治性を混同していると批判し、カミュの思想が非-歴史的志向に基づくことを強調する。それは貧しい入植者の家庭——非識字という点で活字文化と縁

遠く、歴史＝物語（histoire）から隔てられた環境——に生まれ、アルジェリアの豊穡な自然のなか人間の営みが無化されるのを肌で感じて育った経験に由来する。彼にあって歴史的価値は原初から相対的な意味しか持ちえない。植民地主義の不正を糾弾し、ファシズムやナショナリズムの台頭に警鐘を鳴らすカミュの危機感は、政治的言説の次元を超えて、伝統主義に対する違和感に連結する。このとき作家が見据えるのは、あらゆるヒエラルキーや対立構造を無化する地平なのである。

このような観点から著者は当該時期の作品を再考する。たとえばカミュは叙情的エッセー『結婚』においてローマ遺跡のチバザを描きながら歴史には言及せず、一貫して人間の肉体と自然の称揚に専念しているが、そうした姿勢に著者が読みとるのは、古代ローマに西欧覇権の根拠を求める帝国主義的言説への挑戦であり、同時に、過去無き〈アルジェリア〉を具現化する創造的な試み、すなわち政治的意図に基づく非-歴史性の創出にはかならない。この点に絡み、伝統主義者ルイ・ベルトランのチバザ論と対比する著者の手際はじつに鮮やかである。『異邦人』については、ムルソーが体現する無関心＝無差異（in-difference）の倫理が、あらゆる序列化を否定する意志という側面において、アルジェリア時代の作家の全活動を律する「モラルの精髓」⁶⁾に通底しているとされ、さらにムルソーの殺人は「植民者」対「原住民」という視点からではなく、アルジェの街に根ざす「男」の論理に縛られた者同士の対決として読み解かれる。

第2部「歴史の不在と小説創造の問題」はカミュが「小説家として誕生する」⁷⁾まで、つまり習作時代から『異邦人』完成までに要した長い道のりを論じ、その難航が物語＝歴史（histoire）とは相容れない時間性への志向に由来することを指摘する。若きカミュが創作を試みた当初、「ルイ・ランジャール」と呼ばれる草稿群は物語として成立するに至らず、つづく『幸福な死』も習作の域を出なかった。主因は特権的瞬間の美学や、現在時の継起を再現する描写法に彼が拘り続けたためである。このような時間性を表現するのに適するのは年代史的な構成を必要としないエッセーの形式であり、実際「ルイ・ランジャール」の断章は随想録『裏と表』に組み込まれる。作家はおよそ10年の試行錯誤を経てようやく『異邦人』の完成にこぎつけるが、それが可能となったのも「挿話間の因果関係を第2部で取り入れつつも、それを虚偽のものとして読者に提示

し、第1部で描いた現在時の継起にだけ生きるムルソーの態度を真実の生として浮き彫りに」⁸⁾する手法を創出できたからである。著者によれば、時の持続を瞬間の断絶的連続から捉えながらも、それらを関連づけ構造化することを拒む物語として『異邦人』は成立したのであり、これこそ反歴史＝反物語の小説というパラドクスの到達点なのだという。

「歴史への参入」と題された第3部は、ヨーロッパに活動の場を移した作家の思索の変化をたどる。第2次大戦勃発時、アルジェ地元紙の記者だったカミュは停戦を主張した。それは国家の大勢を占したイデオロギーに異議を唱える平和主義と無差異の倫理に根ざしていた。だが占領下のフランスでレジスタンスの報道活動に従事するうち、不当に奪われた自由と正義を回復するため暴力を容認するに至る。『ドイツ人の友への手紙』はこの転回までのためらいの記録であり、弁明の書として企図された事情を著者は看破している。

戦後の対独協力者肅正問題こそはカミュ最大の転機となった。モーリヤックが肅正の行き過ぎを警告したのに対し、カミュは当初、たとえ不完全でも正義の遂行を主張した。自由と正義の戦いを完遂するため、犠牲を厭わず不純分子に制裁を課すことを選択したのである。この問題について著者はこう述べる。目的絶対化の論理はカミュ本来の非－歴史的志向と矛盾したが、やがて作家は硬直化した論理の危険を思い知る。そして彼が肅正の不正義を悟ったとき、悔悛のうちに新たな思想が懐胎され、『反抗的人間』という告白が生まれたのだと。

カミュは1945年9月を境に政治的沈黙を守り、反抗の思想は深化する。不条理の限界やナチスが体现するニヒリズムを射程に入れて構想された反抗の思想は、行き過ぎた正義の追求が隠す不正義をも暴く。折しも東西イデオロギーの対立が激化する時代、カミュはマルクス主義が孕む暴力の問題にも敏感であった。『反抗的人間』は排除の論理から成る歴史観への異議申し立てを主眼とし、二項対立の構図による権力闘争の図式そのものを否定した。かわってカミュが提唱したのは人間の普遍的＝身体的価値の優先であり、その価値観を基盤にした人間の共同体であった。このように論旨が曖昧と評されがちな『反抗的人間』について、著者は的確に補助線を引き、総合的な視点から再解釈に成功した。ロラン・バルトとの『ベスト』論争にかんする解説もふくめ、カミュの思想が体系化する過程を浮き彫りにする論証は見事の一言に尽きる。

第4部「歴史と忘却——反歴史小説としての『最初の人間』」は、カミュ最後

の小説について「作家の歴史をめぐる思索の最終地点」⁹⁾ という観点から論じる。小説としては初めて様々な歴史的事件にじかに触れつつ、作家は個人の記憶を超えた家族の歴史、さらにアルジェリア植民者の歴史を織り込もうとした。それは「因果関係に支配された歴史の説明とは異なる仕方ではかに歴史を書くのか」¹⁰⁾ という問いへの回答であった。ここでもまたカミュは、過去の歴史に基づく序列化に対する異議、目的によって正当化される暴力への批判を貫いている。著者は『最初の人間』執筆のさい作家が渉猟した歴史資料を精査し、彼がアルジェリア＝フランスの歴史を貧者の歴史——無知と疲労による忘却に甘んじ、語るべき家系も伝えるべき伝統もない名も無き人々が織りなす歴史——として描こうとしたと指摘する。こうした非－歴史を歴史的文脈に引き入れ、祖国を記憶にとどめることは、言語の力を手に入れた作家の責務である。アルジェリアの歴史はたえず秩序を無化し、フランス、さらにはヨーロッパの歴史がもつ構造を解体せずにはいない。『最初の人間』は、「歴史を取り入れ構築しようとする作家の意志と、歴史を絶えず非－歴史的なものへと引き戻そうとする欲望が絶えず拮抗することによって成立」¹¹⁾ した、そう著者は結ぶ。

最後に本書の意義を今いちど確認すると——。カミュにおける歴史の問題が従来論じられてきたよりも「幅広い主題」¹²⁾ であることを論証するため、著者は各時代状況のなかで作家が選びとった政治態度を具体的にたどりながら、それが何に由来し、何を目指していたかを考究する。対象作品を限定せず、カミュの文学全体にかかわる問題として歴史という主題を捉えなおすことで、作家の思想と文学を有機的連関のうちに位置づけ、カミュの抗するところの「歴史」の意味を明確にした功績はきわめて大きい。かかる良書が日本で公刊されたことを喜ぶとともに、今後その成果が世界に向けて発信されることを切に願う。

註

- 1) Albert CAMUS - Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance 1944-1958*. Édition établie, présentée et annotée par Claude SICARD, Paris : Gallimard, 2013 ; Albert CAMUS - Francis PONGE, *Correspondance 1941-1957*. Édition établie, présentée et annotée par Jean-Marie GLEIZE, Paris : Gallimard, 2013 ; Albert CAMUS - Louis GUILLOUX, *Correspondance 1945-1959*. Édition établie, présentée et annotée par

- Agnès SPIQUEL-COURDILLE, Paris : Gallimard, 2013.
- 2) 震災直後の『ペスト』への言及については、以下を参照—— Hiroshi MINO, « *La Peste à Fukushima* », *Philosophie Magazine*, hors-série « Albert Camus : La pensée révoltée », mars 2013, pp. 98-99. また本年は専門研究者によらないカミュの入門書 2 点が大手出版社より刊行されている——宮田光雄『われ反抗す、ゆえにわれらに在り——カミュ『ペスト』を読む』, 岩波書店, 2014 年; 石光勝『生誕 101 年「カミュ」に学ぶ本当の正義——名作映画でたどるノーベル賞作家 46 年の生涯』, 新潮社, 2014 年。
 - 3) 千々岩靖子『カミュ——歴史の裁きに抗して』, 名古屋大学出版会, 2014 年。
 - 4) この表現は以下の書名による——三野博司『カミュ『異邦人』を読む——その謎と魅力』, 彩流社, 2002 年。
 - 5) 帝国主義者としてカミュを批判するエドワード・サイードの言説が代表的である。『異邦人』についてサイードは、アラブ人の名前と人格を剥奪し、自然の一部として「寓話」を成立させているとして以下のように述べる——「カミュもまた、本来ならばあってしかるべき帝国主義のアクチュアルな現実がすっぽりと抜け落ちている作品を書いた小説家である」(『文化と帝国主義』, 大橋洋一訳, みすず書房, 第 1 巻, 1998 年, 313-314 頁。ただし訳は一部改変した)。
 - 6) 千々岩前掲書, 84 頁。
 - 7) Voir Jacqueline LÉVI-VALENSI, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier (1930-1942)*. Édition établie par Agnès SPIQUEL, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », 2006.
 - 8) 千々岩前掲書, 130 頁。
 - 9) 同上, 9 頁。
 - 10) 同上, 222 頁。
 - 11) 同上, 263 頁。
 - 12) 同上, 6 頁。